

★★

勝池レポート アジア資産運用アドバイザー 勝池和夫

インドの可能性④—インド経済は金メダル候補—1

★★

下表は、2020年のGDPの大きさ順に、各国をオリンピックの入賞のように1位の金メダルから8位まで並べたものです。金メダルはアメリカ、銀メダルは中国、日本は銅メダル、これからお話しするインドは5位に入賞しています。数字は各国の中位年齢です(国連調べ2019年)。

GDP オリンピックの入賞 (2020年)

1金	2銀	3銅	4	5	6	7	8
米	中	日	独	印	英	仏	伊
38.3	38.4	48.4	45.7	28.4	40.5	42.3	47.3

私が2006年に初めてインドを訪問した時は、同国の経済規模は入賞には遠く及ばずの14位、メキシコよりも小さかったことを思うと、インド経済はそれから随分と大きくなりました。インド経済のこの5位という順位は、前回の東京五輪(1964年)の時の日本経済と同じ立ち位置です。日本経済はそれから、フランス、イギリス、西ドイツを追い越し、1968年には銀メダルを獲得するところまで順位を上げました。しかし、金メダルのアメリカの背中が見えてきた頃、その勢いは衰え、2010年には40年以上も保ってきた銀メダルの座を中国に明け渡すこととなります。この日本経済の軌跡を参考に、今後のインド経済、株式市場、そして通貨を見通すと、日本の投資家のこれからの人生100年時代の資産形成のための重要なヒントに気づきます。

1964年東京五輪の開会式当日の日経平均の終値は1,230円でした。そして1ドルは360円でした。もしその時、アメリカ人がドルを円に換え日本株を買っていたら、彼らは日本経済の高成長に支えられた株高と円高で、莫大な利益を手にしたはずです。では、現在5位のインドの場合はどうでしょうか?2021年から日本の投資家が、円をインドルピーに換えインド株式市場に投資したとしたら、大きな恩恵を期待できるのでしょうか?私の結論は、「十分に期待できる」、です。今までのインド経済は、BRICSの一国として、オリンピックで言えば、入賞を狙う過程でした。しかしこれからは、メダルを狙う段階に入ると思います。それも日本が果たせなかった金色のメダルも夢物語ではないでしょう。

インドの株式は長期の投資先として大変有望です。もしかすると1964年時点の日本株より投資妙味があるかもしれません。その理由は主に次の2点です。

まずは若さです。インドは、上の表にあるように高齢化が進む世界の中の、唯一の若い大国です。現在人口13億8千万人のインドの中位年齢は、1964年の日

本とほぼ同じ 28.4 歳ですが、それは 2050 年になっても 37.5 歳と、現在のアメリカ (38.3 歳)、中国 (38.4 歳) より若いと予想されています。

次にテクノロジーです。これからのインド経済の更なる躍進を牽引するのが DX(デジタル・トランスフォーメーション)です。この度の新型コロナウイルスの感染拡大は、インドの DX を 5~10 年前倒したのではないかとされています。

このインドのデジタル化の加速と、巨大市場と優秀な人材にこれからの成長の活路を求めた、アメリカの GAFAM やテスラのインドシフトについては、次回 9 月号の『シリコンバレーからデカン高原へ』で地図を使いご説明します。

因みに 1964 年頃の日本の家庭の豊かさの象徴は、3C (カラーテレビ、クーラー、カー) でしたが、これからのインドの人々の憧れは、スマホ、AI、EV (電気自動車) かもしれません。現在インドは国を挙げて、AI、EV、そしてワクチン製造の世界のハブになることを目指しています。他方で寂しい予想ですが、日本の経済は多分後 10 年以内にメダルを失う可能性があります。それどころか、このままでは 2050 年頃になると、8 位までの入賞さえ覚束なくなる心配もあります。誰もあまり考えたくありませんが、それが私たちを待ちうけている人生 100 年時代に起こりうる現実です。少子高齢化と技術者の減少が日本経済の未来に暗い影を落としています。

ですから、その日本とは真逆の勢いにある、圧倒的な若さとテクノロジーの大国インドの株式を、自分たちの資産チームの中に金メダル候補として加えることが、大変重要な意味をもってくるのです。

国際分散投資も決して悪くはありませんが、私はそれだけでは、これからの人生には少々スパイスが足りないと思います。

新型コロナウイルスの感染が収束に向かっているインドは、いよいよその経済の黄金時代を迎えようとしています。



(インド文化の黄金時代と言われる古代インドのグプタ朝(西暦 320 年~550 年頃)の金貨。そのころのインドの GDP はダントツに金メダルでした。)